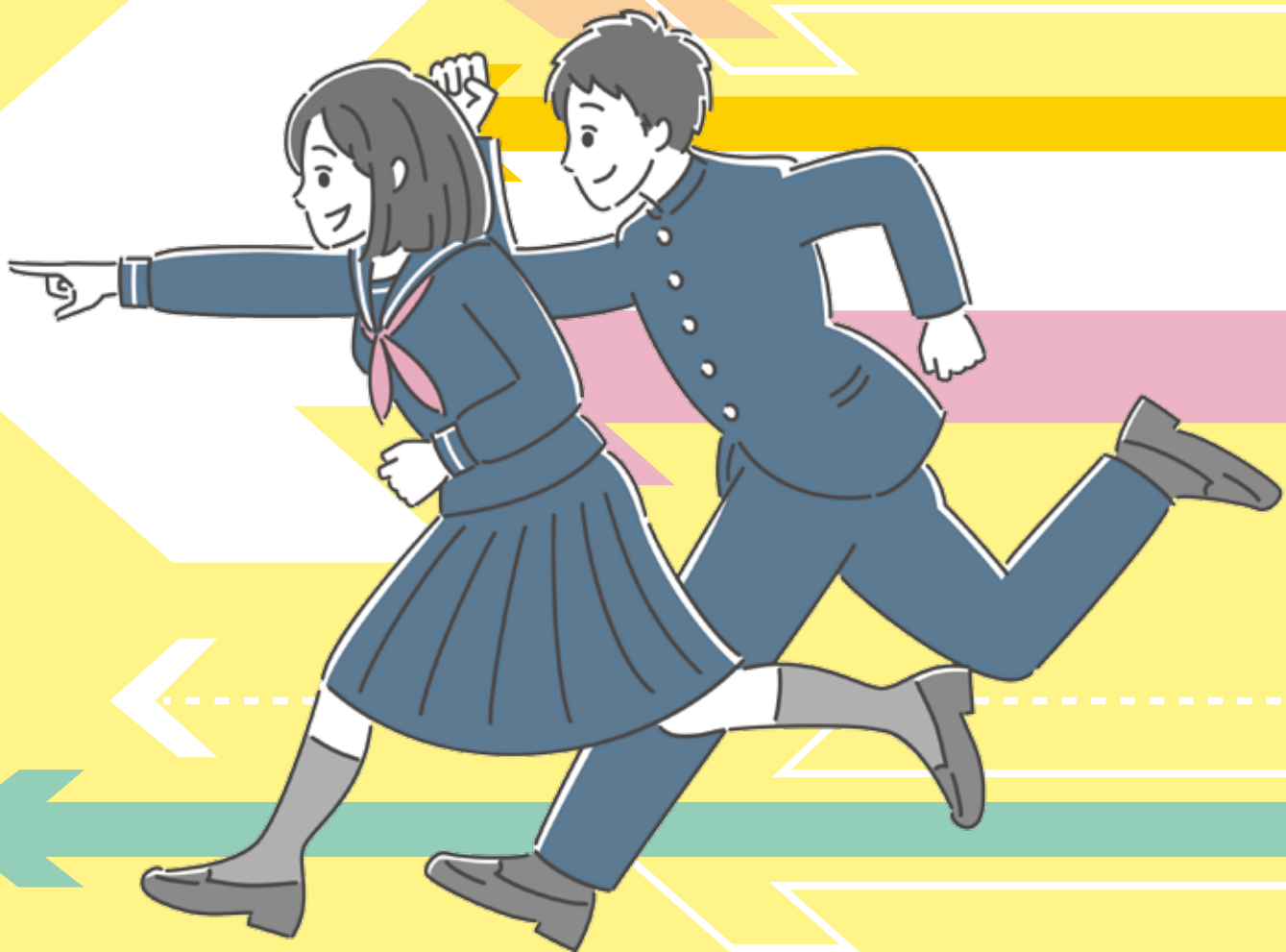


令和4年度

# 少年の主張 全道大会



## 発表作品集

公益財団法人北海道青少年育成協会  
北 海 道  
独立行政法人国立青少年教育振興機構

# 目次

## ● はじめに

公益財団法人北海道青少年育成協会会長 竹谷 千里 …………… 1

## ● 令和4年度「少年の主張」全道大会発表写真 …………… 2

## ● 講評

審査員長 山田 誠一（北海道中学校長会情報部副部長／安平町立早来中学校長） …………… 4

## ● 作品集

### 【最優秀賞】

込められた意味 金 美怜（江別市立大麻東中学校3年） …………… 6

### 【優秀賞】

カミングアウト 藤浪 あい（中標津町立中標津中学校3年） …………… 7

「戦争を知る」とは 細畑 綾香（厚沢部町立厚沢部中学校3年） …………… 8

世界へ届け 私の一步  
－個性の違いを認め合う－ 岸 楓珂（長沼町立長沼中学校3年） …………… 9

### 【奨励賞】（地域順）

地域との交流から気づかされたこと 福原 未桜（仁木町立銀山中学校3年） …………… 10

力の源 田畑 妃毬（むかわ町立鶴川中学校3年） …………… 11

人には皆価値がある 嶋田 桃花（新ひだか町立三石中学校3年） …………… 12

食品も大切な一つの「命」 田邊 惺菜（函館市立赤川中学校3年） …………… 13

「違うこと、受け入れること」 藤川 才子（名寄市立名寄中学校3年） …………… 14

勉強は忌むべきものか 佐藤 雪奈（羽幌町立羽幌中学校3年） …………… 15

本当の幸せ 久保 花稟（礼文町立香深中学校2年） …………… 16

偏った「当たり前」

－ジェンダーを通して考えたこと－ 吉田 百花（美幌町立北中学校3年） …………… 17

思いやる心と勇気 小島 唯（大樹町立大樹中学校3年） …………… 18

『跳ぶ』 武藤 楓真（浜中町立浜中中学校3年） …………… 19

常識にとらわれないために 五島 一響（札幌市立北栄中学校3年） …………… 20

「私と剣道」 佐々木 翠優（札幌市立藤野中学校2年） …………… 21

## ● 参考

令和4年度「第44回少年の主張全国大会」～わたしの主張2022～内閣総理大臣賞受賞作品 …………… 22

## ● 資料

大会のねらい／大会のあらまし／審査員 …………… 23

令和4年度「少年の主張」総合振興局・振興局地区大会開催状況 …………… 24

令和4年度「少年の主張」実施要領 …………… 25

## ● 「少年の主張」全道大会 歴代最優秀賞並びに優秀賞受賞者名簿 …………… 27

# はじめに

「少年の主張」全道大会は、昭和54年の国際児童年を記念して始められました。こうして作品集を発行し、皆様にご覧いただけることを大変うれしく思います。

この大会は、人格を形成する上で重要な時期にあたる中学生が、日常生活を送る中で感じていることや社会に向けての意見、未来への希望などを中学生自身の言葉でまとめ、それを広く発表する機会です。これにより、同世代の中学生に周囲の人々や社会との関わりについて、より深く考えていただき、社会の一員として自覚していただく契機とすること、また、道民の皆様が中学生の考え方、感じ方、意見等に直接触れることにより、青少年育成への理解と関心を深めていただくことを目的として開催しています。

今、少子高齢化、国際化、情報化等が急速に進展する中、青少年を取り巻く環境も大きく変化しています。そのような中で、彼らの主張に真摯に耳を傾けることは、私たち大人の責任でもあると考えています。

これからの北海道を担う輝かしい存在である青少年の皆さんには、自分たちの意見を発表することを通じて、広い視野と柔軟な発想を育むこと、論理的に物事を考えること、自分の主張を他の人に正しく伝える力などを身につけて欲しいと願っています。

今年は、道内301校から26,053名の方が応募され、地区大会を経て、16名の方が全道大会に進みました。全道大会で最優秀賞を受賞した金美怜<sup>きん みれい</sup>さんは、北海道・東北ブロック大会を経て、全国大会において奨励賞を受賞されました。この作品集は、その16名の皆さんの生き生きとした主張を掲載したものです。

この作品集を一人でも多くの方に読んでいただくことを願いつつ、本大会を開催するに当たり、ご協力いただいた関係の皆様にご心からお礼を申し上げ、ご挨拶といたします。

令和4年12月  
公益財団法人北海道青少年育成協会  
会長 竹谷 千里



# 令和4年度「少年の主張」全道大会発表写真





## 全体講評

新型コロナウイルス感染拡大防止の観点から、今年度の「少年の主張」は昨年度に引き続きビデオ審査となりました。早く感染症が終息し、従前のように会形式で再開できることを期待しております。なぜならば、今回各地区の代表となった皆さんの発表内容がいずれも素晴らしく、また、近接する領域について論じていることもあり、発表者同士の交流ができれば新たな化学反応が期待される気配があるからです。

本大会の意義について少々述べたいと思います。

自分の胸の内に秘めていることを人前で発表するという行為に対し、恥ずかしいと気持ちをもつことは中学生という発達段階においてはよくあることだと理解しております。しかしながら、中学生という心身が大きく成長する時期に、心が感じていることを言語化し発表することには大きな意義が存在します。

人の心が成長するためには、自分の思っていることを他者に投げかけて返ってくる反応が必要です。共感的な反応であれば、自己の考えの成長の方向性に一定の安心感が得られますし、批判的であれば自己修正を行うことで自分と他者（社会）との関係を構築していくこととなります。これらは日常の何げない友人との会話の中にも埋め込まれていますし、学習中の話合いにおいても機能しています。当然のことながら、主張発表という場はその極地の一つであり、周囲からの反応のレベルも高いため、発表者は心の成長のための質の高い糧を得ることとなります。

主張発表の際には原稿を丁寧に作り、推敲を重ね、自分の考えをまとめます。その際に、過去の自分の考え方や生き方そのものとの整合性に留意することとなります。「自分とは何なのか」、「自分とはどういった人間なのか」といった問いと回答を主張発表原稿と照らし合わせる作業を繰り返すこととなります。これはなかなか苦しい取組ですが、今回の16人の発表者は全員その試練を乗り越え、自身の経験や考え続けてきたことを自分の言葉で表現していることは審査を行っている中で強く感じたところです。

発表者はこの大会への参加をとおして、心が更に大きく成長し、自分が世界の中心であった幼少時から社会の中の一人としての自我同一性をつかみかけていることと思います。

その上で、本大会の主旨である「他者を思いやる心もち、社会的に自立していける、健やかな成長」も促され、次世代の社会を担う人材へと大成されることを期待しております。

今年度の発表においては多様性、ジェンダーフリー、SDGsといった象徴的なキーワードが常識の一つとして扱われつつあることが特徴であったと思います。その上で違いを個性として尊重し、個性を生かした協働的な社会の構成を目指す考え方が主流となる状況にまで到達しました。これはたいへん素晴らしいことであり、日本の未来も明るいと思ふことができるところです。一方、我々大人の側は猛省し、今できることを模索しなければならないことも自明です。

さて、審査についてですが、論旨を5観点、論調3観点の計8観点を5人の審査員で審査しました。16人の発表内容はそれぞれに思いと願いが込められており、その純粋な気持ちに込められるべく我々審査員も、何度も原稿を読み、ビデオを視聴しました。最優秀賞を受賞された、江別市立大麻東中学校の金さんの主張は、戦後日本が構造的に抱える課題を現代社会が目指す多様性社会の観点からの意識改革をもって解決に導きたいという強い決意が伝わる素晴らしい内容でした。また、優秀賞の3人の皆さんにつきましても、最優秀賞とは僅差であり、奨励賞になった12人の皆さんも立派な主張でした。

末筆になりますが、お子様の大会出場を温かく後押ししていただいた保護者の皆様、御指導を頂きました先生方、各学校単位において参加していただいた中学生の皆さん、大会運営に携わっていただいた多くの関係者の皆様の益々の御活躍を祈念し、全体講評とさせていただきます。

## 1 岸 楓珂さん 「世界へ届け 私の一步 —個性の違いを認め合う—」

自分の心の中に宿った弟への偏見が解消されていく過程で、個性の違いを互いに認め合う社会を構成していきたいという力強い決意が伝わってきます。弟への愛情が発表者の心の成長を促しただけではなく、はじめ、差別、偏見の解消といった多様性社会の構成員としての自覚と歴史的な課題の解決を「互いの良さを分かち合う」形で進めていく考えが丁寧に述べられており、聞き手の心をも大きく揺り動かす主張です。

## 2 金 美怜さん 「込められた意味」

名字に対する周囲の反応への悩みが、父の幼少期の苦勞を知り現在の考えを理解することで水解し、自己のルーツを肯定的にとらえて生きていく決意に満ちた内容です。日本が抱える差別問題を無くすことはもちろんのこと、「違いをプラスにとらえる考え方」を経由した「違いを理解し寄り添う生き方」を社会全体で共有する未来を提唱しています。これは今後、一層重要となる多様性社会の実現に関する経験に基づいた主張です。

## 3 福原 未桜さん 「地域との交流から気づかされたこと」

地域が有する人間的な触れ合いが一人一人の心を豊かにしていく様を実体験を基に述べています。物理的な生活環境の便利さが当たり前前の生活からの地域への転入は苦勞の連続でしたが、我が身を地域に参加、学習していくことで、地域の良さ、人々の心情を理解し、自身の考え方にも大きな変容が見られます。中学生側が地域に関心をもつ仕掛け、地域側が若い世代と連携する仕掛け作りの提言内容も立派です。

## 4 田畑 妃穂さん 「力の源」

スケート選手としての自身の経験から、モチベーションが維持される要因を丁寧に分析しており、これは多くのアスリートのみならず中学生の日常生活全般にとって参考になる内容です。大会を運営する側の立場を経験することで、選手としての自分を支えてくれる周囲の人々の頑張りや内なる願いを深いレベルで理解し、相互の関係性の中で人として大きく成長していく決意は実績を伴う文脈であるため説得力があります。

## 5 嶋田 桃花さん 「人には皆価値がある」

障がい者施設で発生した事件を題材に、障がい者への偏見、無関心といった課題の解決についての主張です。事件の際にキーワードの一つとなった「自分の意志をもっていない」という考えに対し、実体験を基に「伝える力が弱いだけ」とであると論じ、更に踏み込んで聞き手側と一緒に考えることで「お互いに障がいを乗り越える成長」が大切であると明快に述べるあたりは、テーマのとおり強い普遍的理念が基礎にあり、尊敬に値します。

## 6 田邊 惺菜さん 「食品も大切な一つの『命』」

「食品ロス」問題に、身近な学校給食から世界規模までの視点で多くの人が危機感をもつよう主張しています。環境問題への取組である3RのうちのReduce（無駄なゴミの量を減らすこと）の観点から、中学生が家庭でできる具体的な取組を紹介するとともに、一人一人が食品ロス問題を生産者の気持ちや食材が「命」であることを意識することで、企業や国家レベルでの動きを促す原動力となることを力強く訴えかけています。

## 7 細畑 綾香さん 「『戦争を知る』とは」

原爆資料館で見た2枚の写真から、真の意味で戦争を知り、伝えることの困難さと重要性について主張しています。戦争によって被害を受けた人々が「実際に感じた怒りや悲しみ」を現代社会に生きる我々が我が事として想像することが、戦争を抑止し平和維持につながっていくことを的確に述べています。心が感じた衝撃と悔しさ、自身ができることを見出すまでの思考プロセス、行動していく決意が聞き手の共感を呼びます。

## 8 藤川 オ子さん 「違うこと、受け入れること」

ホームステイ先における「相手の国への文化への敬意」と「相手の国の文化に自分を合わせる」ことを受け入れ先も自身も持つことから見えてくる地平について述べています。日本人は自己主張が苦手であることを理解し尊敬しているとまで言ってくれるホストマザーに対し、敢えて自己主張をすべきか悩むことから、異文化交流のあり方、そして人間関係のあるべき姿について論じている新鮮な示唆を与える内容です。

## 9 佐藤 雪奈さん 「勉強は忌むべきものか」

学校における勉強は、特に中学校においては「記憶再生」の枠組みに矮小化されてしまう傾向があり、これは教育関係者が改善すべき課題であります。その本質的な問いに対し、中学生の日常の経験からの気づきを基に正面から切り込む論じ方には迫力があります。勉強とは経験であり、経験は人生を豊かに彩り、その経験は新たな学びを誘発するという心理学の領域のメカニズムに中学生の段階で到達していることは尊敬に値します。

## 10 久保 花梨さん 「本当の幸せ」

人間誰しもが求める幸せについて、自身の内面における演繹を極限まで用いた質の高い発表です。特筆は「幸せの達成には優先順位があるのではないか」というアドラーやマズローと言った心理学者の考えに到達している考え方、そして精神的な飢餓状況が幸せに向けての行動を促進するという達観ぶり、一転して日常のささやかな一コマに人生の充足感を見いだせるという具体策と充実した内容の主張です。

## 11 吉田 百花さん 「偏った『当たり前』」

### —ジェンダーを通して考えたこと—

ジェンダーフリーがまだ実現できていない社会状況を厳しく分析しつつ、「当たり前」とされてきたことを随時見直すことの重要性について主張しています。社会風潮が形成される際に中心勢力となるメディアには責任ある報道を求め、性別一括りによるステレオタイプの思考から「個性を一番に考えるべき」等、社会全体への提言も力強く鋭いです。当たり前に対する「問題意識をもつこと」から始めようという提案も説得力があります。

## 12 小島 唯さん 「思いやる心と勇気」

戦争や紛争が発生している土地におけるボランティア活動に関する書籍を読み、自身の生き方と照らし合わせた上で前向きな気持ちで生きていく決意が述べられています。中学生の段階でできる「小さなこと」からまずは第一歩を踏み出すべきとの主張に説得力があります。その具体例としての、廊下のゴミを拾うなどの「仲間を思いやる心」から生まれる「誰かの役に立つ行為」は必ず大きな成果へとつながっていくことと思われまます。

## 13 武藤 楓真さん 「跳ぶ」

少年の主張全国大会報告書を読み込んだことから、自己の劣等感の解決の方向性を見出し、自分の生き方に自信をもつに至るといふ、本大会の主旨を正面から受け止めた中学生らしい瑞々しい主張です。自分の苦手、短所を弱点として直視し、そんな自分を認めるという厳しい出発点から「努力をベース」とする解決策とその成功は万人に生きる勇気を与える内容です。

## 14 藤浪 あいさん 「カミングアウト」

HSP（Highly Sensitive Person = 繊細な気質をもって生まれた人）への理解を求める主張です。敏感で繊細なため生きづらさを感じている人々の生活環境の改善策として、社会的な関心を高め、当事者への理解をもった接し方の普及を呼びかけています。対象はHSPが中心ですが、論調の行間からは様々な気質や特徴を個性として互いに理解し合い、協働的な社会を構成することの重要性への主張が滲み出ています。

## 15 五島 一響さん 「常識にとらわれないために」

「さんぼセル」（ランドセルをキャリアバック化するツール）開発への批判現象を事例とした、課題解決における新しいアイデアの扱いについての主張です。既成概念にとらわれると「問題が解決する未来を狭めてしまう」と喝破し、問題先送りの風潮からの脱却を「新しいアイデアを起点として考える」ことで実現することを提案しています。議論の際には論拠を示すことの重要性も述べており、大人の側も耳を傾けるべき内容です。

## 16 佐々木 翠優さん 「私と剣道」

剣道の修行に内在する人間形成の言葉や仕組みを知ることにより、益々剣道の奥深さに感じ入り、稽古に情熱を注ぐ様子が目に浮かびます。団体戦敗時の責任を感じ滅入る気持ちを救ってくれたのは、顧問の先生からの「適切な間合い」のある「相手の気持ちに添った言葉」と解釈できるのは、人生の多くの事象を剣道をたとえに理解できる素地が形成されていることを示しており、今後の更なる成長が大いに期待されることです。



## 込められた意味

江別市立大麻東中学校 3年

きん みれい  
金 美怜

あなたは、「人と違う」ことを恥ずかしいと感じたことはありますか。あなたにとって「普通」とは何だと思いますか。

私の父は韓国人で、俗に言う「在日韓国人」です。私の「金」という苗字も、父のものです。

この苗字を聞いた時、多くの人は、物珍しそうな目で私を見ます。そして、何かを悟ったような顔をします。私は、それを見るたびに、うんざりしました。区別されている気分で、居心地が悪かったからです。

小学生の頃は、苗字をいじられることも多く、基本、笑って返していましたが、やはりいい気分ではありませんでした。友達には悪意がないことを分かっている回数を重ねるごとに、「私は人と違う」「私は普通じゃない」という思いが強くなっていきました。

こうしたことが度重なり、いつからか私は自分の苗字が嫌いになっていました。自分で名乗ることも、誰かに呼ばれることも、全てが嫌で仕方ありませんでした。

もちろん、親に話すことなど出来ませんでした。話せば、悲しい顔をさせてしまう、困らせてしまう、と分かっていたからです。

親には言わない、そう決めていたつもりでした。ですが、ある時、母に本音をぶつけてしまいました。

「皆は普通の苗字なのに、どうして私は普通じゃないの？何で私だけいじられなきゃいけないの？こんな苗字なんか、嫌いだ！」

言い過ぎたと思った時には、もう手遅れでした。母は、悲しそうな、困ったような顔をしました。

「そんな顔をさせたかった訳じゃないのに」私はすぐに後悔しました。その反面、私の中には、明確な答えが返って来なかったことに対するモヤモヤした気持ちが残りました。

何も変わらないまま、ただ時が過ぎて、私が中学生になってしばらくした、冬頃でした。父が、ニュースを見て、

「この人、在日じゃないかな。」と呟きました。疑問に思い、父に聞いてみました。

「どうして苗字を変える人が多いの？」

父は、少し顔を曇らせてから、話し始めました。「昔は、今よりも差別が酷かったんだ。その名残みたいなものかな。隠すためだよ。」

父の口から、このことを聞いたのは初めてでした。そして、私に、父が中学二年生の時に書いた生活体験文を見せてくれました。

読み終えた時には、涙が頬を伝っていました。あまりにも残酷で衝撃的過ぎる内容を受け止めきれませんでした。所々違う送り仮名や決して上手じゃない表現も、今は私の涙を誘うだけでした。この時、初めて知りました。差別やいじめに耐えられず、叔父が自殺しようとしたこと。父が日本に来てから苦労した数え切れない程、沢山のこと。これまでの父を思うと、涙は止まりませんでした。

父は淡々と話しました。「俺は、苗字を変える必要なんてないと思ってる。悪いことじゃないんだから。これから先、この苗字で嫌な思いをすることもあるかもしれない。それでも、堂々と生きなさい。」

初めて苗字に隠された父の思いを知りました。解消されることのなかった私の心の中のモヤモヤは、その言葉で消えました。

苗字を変えるか、変えないか。この選択に正解はないと思います。ただ、一つだけ言えるのは父がこの選択をしてくれて、良かったということです。

私は、それ以来、隠すことをやめ、父の望む堂々とした生き方をしたい、と思えるようになりました。

父のおかげで、私には他の人よりも広いルーツがあるのです。それは、何にも代えられない、私の宝物です。

そして、同じような立場の人が生きやすい世の中になってほしいな、と思います。「人と違うことは何も悪いことじゃない」と、誰もが言える世の中であってほしい。そう強く願います。私自身、違いを排除するのではなく、理解し、寄り添おうとする生き方をしていくつもりです。

皆さんも「人と違う」ことをマイナスに捉えるのではなく、プラスに捉えてみて下さい。

違うことを気に病んだりせず、自分だけがもつ、「かけがえのない一面」と考えてみませんか。きっと視界が広がって、いろいろな思いを知ることが出来ると思います。

私の思いが少しでも多くの人に伝わると嬉しいです。





## カミングアウト

中標津町立中標津中学校 3年

ふじなみ

藤浪 あい

「五人に一人」と聞くと、どのような印象を受けますか。人口の二割と言われると、身近に感じるかも知れません。

この数字は、「HSP」という気質を持つ人の割合です。

HSPは、ハイリー・センシティブ・パーソンの略称で、非常に敏感な人々という意味を持ちます。「繊細さん」の愛称でも、少しずつ浸透してきました。この愛称の通り、五感のアンテナをずっと張っているHSPは、頻繁に気疲れをしてしまいます。例えば、足音の大きい人が居ると、自分のせいで怒っているのではないかと不安に駆られます。その人が怒っていなかったとしても、いわれのない責任を感じてしまうのです。日常生活に影響が無いとは言えません。

そんなHSPは、気質です。性格やセンスと何ら変わらない、生まれもったものなのです。つまり、HSPがどれだけ辛くても病気ではないため、薬の処方や治療を期待できないということです。

ここで、カミングアウトします。私は、HSPです。

私が小学校の頃、音楽の鑑賞のときに、泣いてしまったことがあります。それほど素敵な旋律だと思ったのです。ですが、周りの生徒が詰まらなそうにしているのを見た途端に感動することが恥ずかしくなりました。感動することはごく自然なことのはずです。しかし、私はこの体験を通じて「自分は異質かもしれない」と酷く落ち込むことになりました。

重度のHSPに悩まされている人がいる一方で、世間には、HSPに批判的な人もいます。「五人に一人もいるのなら、HSPは普通の人と大して変わらない」と主張する人。

「HSPなんてただの甘えだ」と訴えている人。

あなたは、本当にそう思いますか。

HSPの個人差は計り知れません。先ほどのエピソードでも、五人に一人が感動のあまり涙した訳ではありません。感受性が豊かと一口に言っても、人それぞれの感じ方と、悩みがあるはずです。

私は、HSPが普通の人と同じだとも、甘えだとも思いません。もし仮にそうだったとして、重要なのは人数でしょうか。敏感で繊細な人が生きづらさを感じている事実の方がきっと大切だと思います。

五人に一人の当事者がいるHSPですが、保健の教科書に載っていません。悩んでいる人が大勢いるのに薬も治療法もありません。HSPには「ない」ばかりです。まだ、市民権も得られていません。そのせいで、カミングアウトは推奨されなくなりました。皆さんがHSPを知って、関心を持って、理解をして接してくれたなら、私たちはとても生きやすくなります。

HSPは辛いばかりではないです。ほんの少しの気遣いが、飛び跳ねるほど嬉しいです。「ありがとう」の一言で、悲しかったことが吹き飛んでいきます。悲しいことにも、嬉しいことにも、同じだけ敏感だからです。

まだ世間に広まっていないHSPが、いつかきっと、みんなに理解されている未来を、私は信じています。自己紹介のとき、趣味や名前と同じように、HSPだと言える将来を私は望んでいます。

カミングアウトします。私は、HSPという気質を持った女子中学生です。



## 「戦争を知る」とは

厚沢部町立厚沢部中学校 3年

ほそはた あやか  
細畑 綾香

「私はいつもと変わらない木曜日の空に、ある不可解なものを見つけた。何だろうか。何かが落ちてくる。反射的に一步を踏み出したとたんー。」

1945年8月9日、長崎に原爆が落とされた日、人々は何を見たのでしょうか。私は戦争を知りません。戦争を知らない私はその日のことを想像することしかできません。そして、想像の世界の中では、現実の痛みを知ることはできません。

もし誰かに、「戦争について教えて」と言われたら、あなたはなんと答えますか。以前の私は「領土などを巡って、日本が他の国と争って沢山の人が亡くなった。」と答えていたと思います。でもこれは本当に戦争を教えられているのでしょうか。私は本当に「戦争を知っている」と言えるのでしょうか。そんなことを考えさせられる出来事がありました。

私は今年、修学旅行で長崎の原爆資料館を訪ねました。そこには、数々の原爆の恐ろしさを物語るものがありました。私が特に印象に残っているのは二枚の写真です。

一枚目は、小さな男の子が横たわっている写真でした。その背中には、まるで赤い大きな紙をべったりと貼りつけたような大きなやけどがありました。男の子は小さな口をぐっと食いしばっていました。それは、原爆によるやけどだったそうです。

二枚目は、七歳くらいの男の子が赤ん坊をおぶって立っている写真でした。赤ん坊は眠っているようで、男の子は何かをこらえるように遠くをみつめていました。それは、死んだ赤ん坊の火葬を待つ少年だったそうです。なぜ子供一人で赤ん坊を火葬場に連れて行ったのでしょうか。それは、男の子が両親も失っていたからです。

小さな背中を覆い尽くすやけどを負った男の

子。かけがえのない家族を全て失った男の子。二人の男の子の表情が忘れられず、二枚の写真が今も頭に焼きついて離れません。

原爆が、戦争が、私よりも幼い子供たちをこのような表情にしてしまうことを知り、胸が苦しくなりました。それと同時に悔しさを覚えました。私たちがどんなに心を痛めたとしても、戦争を知らない私たちには彼らの痛みを知ることができない。それが悔しかったのです。

何年に何戦争があった。どういう兵器が使われた。戦争を勉強した私たちはそう答えることができます。ですが、本当の意味で「戦争を知る」ためには、もっと違うところに焦点を当てなければならないと思います。戦争の知識を得るだけでは、「戦争を知っている」とは言えないと私は思います。何千、何万人もの人が実際に感じた怒りや悲しみを私たちは知ることができません。だから、「戦争を知っている」とは簡単に言うてはならないのです。

世界からはまだ戦争はなくならないし、町を一瞬で焼け野原にする核兵器も無くなりません。もし自分の大切な人達が黒い涙を流し、誰にも届かない叫びを上げ続ける。それが戦争だということを「知っていたら」、もう戦争なんて起きないはずです。「戦争のない平和な世界の実現」が簡単でないことを知っています。しかし、みんな「戦争を知る」ことができれば、それを現実にできるのではないのでしょうか。

小さな背中を覆い尽くすやけどを負った男の子を、かけがえのない家族を全て失った男の子を、みんなが知れたのならば、戦争をなくすことができると信じています。私はこれからも学び続けようと思います。戦争があった過去を、戦争がある現実を、そこに生きていた人たちを。

優 秀 賞

公益財団法人北海道青少年育成協会会長賞



## 世界へ届け 私の一步 — 個性の違いを認め合う —

長沼町立長沼中学校 3年

きし ふうか  
岸 楓珂

「他人と違う」とは、どういうことなのでしょう。決して差別することではないとわかってはいました。ですが、私は、この「違う」ということをどう考えるべきなのか、悩んできました。そんな私に答えを教えてくれたのが、弟でした。

弟は、私が六歳の時に生まれて、今は小学校に通っています。弟は軽い学習障害のようなものを持っていて、文字が思うように書けません。親から初めてそのことを聞いたとき、「自分とは違うんだ。」「可哀想。」「普通じゃないの。」と、うまく言葉にできない複雑な感情が心に広がりました。そして、いつの間にか弟に対して、なんだか後ろめたい気持ちになったり、哀れみから優しくしなければと考えたりするようになりました。弟とどう接するべきか、分からなくなっていました。他人にはできることが、うまくできない。いつも弟をそういう目で見ていたからです。

ある日、弟が、いつものように私に話しかけてきました。耳を傾けていた私に、ふと、読むことや話すことに弟は長けているのではないかという思いが沸いてきました。確かに弟は、小学校に入る前から漢字をすらすらと読んだり、私よりもたくさんの言葉を使って、その日にあったことを楽しそうに話してくれたりしていました。改めて弟の文字を見ると綺麗とは言えませんが、粋にとらわれない大胆さがあり、心が惹きつけられました。すると、私の中で忘れかけていた弟への愛おしさが、再び溢れ出てきたのです。どうして今まで弟と向き合えなかったのか、後悔しました。真っ直ぐ向き合ってみてわかったのは、他人と違うのは当たり前。弟はかけがえのない存在だということです。その当たり前のことに私はやっと気づくことができたのです。

今振り返ると、あの時、私が弟に行っていたのは「差別」でした。可哀想だからと、優しくすることは、本当の優しさではありませんでした。

私がしていたことは、姉として弟と関わることではなく、自分とは違うと決めつけて、弟から心を遠ざけることでした。大切なあなたを傷つけてしまいました。ごめんなさい。本当にごめんなさい。でも、私は自分の間違いに気づくことができました。それはあなたのおかげです。今の私は、あなたの全てを大切にできるようになりました。あなたはあなたのままでいいのです。今日もあなたは、私にとって自慢の弟です。

人はよく他人との違いを比べて、自分の方が優れていると、都合の良い判断をします。でも、人はみな同じ。完璧な人などどこにもいません。そこに優劣はなく、個性の違いがあるだけです。その個性の違いが、一人一人の魅力なのです。だからこそ、その個性を認め、尊重し合うことで、お互いが生かされていくのです。素晴らしい個性をもった仲間皆さんの目の前にいます。その仲間と共に助け合いながら成長していけることが、どれだけ幸せなことか、誰もが気づけるはずです。

しかしながら、人との違いに優劣をつける「差別」や「偏見」に苦しむ人は、世界中に溢れています。SDGsが掲げている大きな問題です。次代を担う私たちには、今、目の前にある「いじめ」や「差別」「偏見」と向き合い、解決に向けた一歩を踏み出す勇気が必要です。それは、一人一人の個性を認め、お互いの良さを分かち合うことです。今は小さな一歩でも、それが世界に繋がっていけば、いつかは世界を変える大きな力となります。

私は、弟から学んだこの個性の素晴らしさを、これから出会う全ての人に伝えていきます。それがさらに多くの人へと広がっていけば、世界中の人たちにこの思いが届く日が必ず来るはずです。「違いのある個性」を認め合える世界のために、私はかけがえのないあなたと世界を繋いでいきます。

## 奨励賞

### 地域との交流から気づかされたこと

仁木町立銀山中学校3年

ふくはら みう  
福原 未桜



「こんな所つまらない！」と先日までの私は生活をしていました。

私は、もともと札幌に住んでいましたが、家の都合で、親元を離れて生活しています。この銀山に来たばかりのころは、不便さに驚きました。周りには、飲食店も、コンビニさえもなく、休みの日にすることが無いのです。お店がないので、大好きな焼肉や外食をすることは、簡単にはできません。

ある日、おじいちゃんに「焼肉が食べたい」と私が言うと、「草刈りを手伝ってくれたらいいぞ」と返事がありました。私は、「めんどくさいな」と思いながらも、「やる！」と言いました。

コロナ禍の中で、地域の人たちとふれ合うことがなかったため、この草刈りが、地域の人たちとつながる初めての機会となったのです。

通学路の周りや、坂の先にある一軒家など、手作業で草刈りをしました。

多くの地域の人たちが参加していました。町内会長さんに加え、校長先生や、交番の所長さん、郵便局長さんなどがいました。参加者全員が五十歳以上ということに驚きました。

汗水を垂らし、一生懸命作業する姿を見て、この人たちは地域のために協力し、暑い中、作業をしている優しい人たちなんだなあと思いました。同時に、どうしてそこまで地域のことを考えられるのだろうと疑問を持ちました。

草刈りを終えようとしていた時、団地の中から女性が出てきてお菓子を渡しながらか、とても感謝の気持ちを伝えてくれました。喜んでくれている姿を見て、自分もとても嬉しかったです。

草刈りが終わった後は、念願の焼肉で、働いた後は特に美味しく感じ、頑張った甲斐がありました。

地域の皆さんのことをよく知らなかったので、焼肉の最中、進んでいろいろな人に自己紹介をしました。ここへ来る前に、おじいちゃんか

ら「いろいろな人に挨拶をして、その人の名前を覚え、自分の名前を覚えてもらえ」と言われていたからです。

すると、地域の人たちはあまり子どもと触れ合う機会が少ないようで、とてもかわいかったです。おばさんたちと恋バナをしたり、昔の銀山の様子を話したりしてくれました。帰るとき、地域の人たちが名残惜しそうにしてくれ、さびしささえ感じました。

「あっ、その瞬間、疑問の答えがわかった気がしました。ただの田舎だと思っていたけれど、みなさんがこの銀山が好きで、つながりを大切に協力できているからこそ地域に貢献するんだ。皆が、優しい銀山を作り上げているのだと。

今回、この経験を通して私がみなさんに伝えたいことが2つあります。

一つは、中学生がもっと地域の人と関わる機会を増やすことです。学校行事で地域との交流はありますが、このような地域の行事に参加し、当たり前に触れ合う場が必要だということです。そのためには、もっと中高生を巻き込む仕掛けが必要です。皆が参加できるゲームなどを中高生が企画し、地域の人を招待する機会をつくるのはどうでしょう。私も友達を積極的に誘いたいと思います。

二つ目は、人と人とのつながりで地域を活性化させることです。地域の人たちの温かさやつながりの強さがこの銀山の強みなので、もっと若い世代を、今、銀山で頑張っている人たちが引きずり込めばよいと思います。だから、これから私は、地域の人たちにどんどん挨拶をしたり、声をかけたりして行こうと思います。私自身が、地域の人たちと若者を結び付ける存在になれば、きっとこの銀山の魅力に気づいてもらえる。私はそう信じています。

軽い気持ちで行った草刈りでしたが、私自身にとって、大きな成長を感じ取ることができた大きな経験でした。

## 奨励賞

### 力の源



むかわ町立鶴川中学校3年

たばた ひまり  
田畑 妃毬

私が頑張る時、それ以上に頑張ってくれる人がいる。頑張っている人を見た時、自分も頑張ろうと思える。「頑張る」って何だろう。

私は冬休み中、スケートの全道大会を通して得たものが多くあった。それは結果やタイムだけじゃない。私にとって今年全道大会はいつもの全道大会とは大きく違う。まず、いつも練習しているホームリンクが会場だということ、そして自分の学校が当番校だということ。この二つが私にとっては初めての経験であり、いつもと同じよう違う環境でのレースとなった。大会を終え、自分はなぜスケートを頑張っているのか、頑張っているのか考えてみた。全道大会、そして今まで経験してきたことを振り返って、自分なりの答えに辿り着いた。

まず、自分に目指すべき目標があることが大きいと思った。はっきりとした目標があると、自分が何のために努力しているのかがわかり、練習にも積極的な気持ちになる。そして、同じ目標を持った仲間と一緒に練習することで互いに高め合いながら成長出来る。ライバルだけど、大切なチームメイトであり友達なので、辛くても楽しめるし、お互い負けないように努力出来るのだと私は思う。実際に、全道大会で私のスケート靴の故障に気づいてくれたのも、最高のライバルであり最高の友達だった。いくら速くなくても、達成したい目標と、その目標に向かって一緒に頑張る仲間がいないと無理だと感じた。そんな私達選手が目指すべき目標を提示し、導いてくださるのが監督、コーチ。選手に心に火をつけるような熱心な指導。そんな指導者だからこそ、選手は後ろをついて行く。今までを振り返っても、教えてもらったのはスケートの技術だけでなく、礼儀や時間の使い方などの人間力も多い。そんな指導者を尊敬し、培ったことを自分のものにすることが、私達選手に出来る一番のことだと思う。

私は全道大会に選手として出場するのと、もうひとつプログラムの表紙を描く事にチャレンジした。それは、学校の先生方が大会の準備を頑張っているのを見て、出場する側として何か力になりたいという思い、それに加えて選手だからわかること、伝えられることを私なりに表現したいという思いがあったからだ。学校の授業に毎日の氷上練習も加わり、作業が夜中からになったり、寝ずに試行錯誤するなど、時間に余裕は無かったものの、納得がいくまでやり切ることが出来た。こんなに頑張れたのは先生方の頑張る姿を見て自分を奮い立たせることが出来た。さらに最後までやり抜くと覚悟を持って取り組んだからに違いない。表紙を描いてみて、誰かの頑張りが自分へのエールとなるということ、そして自分なりに覚悟を持って取り組むことで、最後まで頑張れるということを学んだ。

私はなぜ頑張るのか、頑張らなくてはいけぬのか。目標に向かって一緒に戦う最高の仲間達。目標達成へと導いてくださる指導者。大会を良いものにしようと準備して下さる先生、役員の方々。一番近くで応援し、支えてくれる家族。私は、このような人たちがいてくれるからこそ頑張れるのかもしれない。そしてこのような人達の頑張りを無駄にしないよう、私は頑張らなくてはいけぬのだと思う。一位を取りたい、速くなりたいだけでスケートを頑張っていたと思っていた。しかし私の気づかない所で沢山の応援とサポートをしてもらっていたことに気づいた今、感謝の気持ちでいっぱい。頑張ってきたのは自分だけじゃない。頑張るのも自分だけじゃない。自分のためだけが、頑張る理由じゃなくていい。関わってきたすべての人達と自分を信じ、今日も明日も明後日も全力で頑張る。

強い気持ち、そして自分を支えてくれる存在や頑張りが、私の「力の源」。

## 奨励賞

# 人には皆価値がある



新ひだか町立三石中学校3年

しまだ ももか  
嶋田 桃花

相模原障がい者施設殺傷事件。

皆さんは二〇一六年夏、この事件が起きたことを覚えていますか。

夏休み中にテレビでニュースを見ていたら(相模原障がい者施設から五年・・・)という言葉を目にしてこの事件のことを知りました。

これは、神奈川県知的障がい者の施設で起き、たくさんの方が殺傷された、痛ましい事件のことです。

この事件は、施設の前職員によって起こされました。夜間に施設に侵入し、持っていた刃物で多くの入所者や職員を傷つけたことにより、十九人の命が奪われました。

犯人は後に、こう語ったそうです。

「障がい者は自分の意思を持っていない。」

「生きる価値がない。」

「意思疎通の十分できない障がい者には、人権がない。」

この言葉を耳にした時、怒りがこみ上げました。なぜなら、生きる価値のない人などいないと思ったからです。

それに、障がいを持っている人たちは、自分の意思を持っていないというわけではなく自分が思っていることを伝える力が弱いだけだ、と考えていたからです。

私の弟も知的障がいと自閉スペクトラム症という個性を持っています。

臨機応変な対人関係が苦手だったり、自分の関心・やり方・ペースの維持を最優先させたいという本能的志向が強いことを特徴とする発達障がいを持っているのです。

でも、自分の言葉で表せないかわりに、おんぶした私の背中をトントンとたたいたり、手をピンと伸ばしたりして、どこへ行きたいのか、

何が欲しいのかということを示してくれます。

ですから、そういうことを通して、上手に言葉に表せなくても、何を伝えたいのか、何をしたいのかということ、私たちが一緒に考えることが大事だと思っています。

初めは、弟の伝えたいことを理解するのが難しかったけれど、手や目線を使って伝えようと頑張っている姿を見ると、私たちもそれに応えよう、読み取ろうと努力してきました。

このような小さなやり取りは、時間を積み重ねることによってバリエーションも増えていきました。

弟のように、障がいを持っている人たちは相手に自分の思いが伝わりにくくて困ってしまうことが少なくないです。障がいを持っている人が何かを伝えようとしている、何か困っていると感じたら、あせらずにゆっくりと優しく寄り添ってあげてください。お互いに障がいを乗り越えて、理解することが大切だと思っています。

悲しいことに、障がいを持っている人に偏見を持つ人も世の中にはたくさんいます。また、直接自分とは関係ないと思い、障がいを持つ人に対する気遣いに考えが及ばない人たちも世界には数多くいるはずですが。

確かに現在は、以前よりは偏見という高い壁はなくなってきています。しかしこれからもっとこの壁を低くして行ってほしいです。そのことによって、誰もが自分は価値のある人間だと言うことに自信を持って生きて行ってほしいと強く心から思います。

私はこれからも、自分だけでは気がつかない様々なことを、弟から学ぼうと思っています。

## 奨励賞

# 食品も大切な一つの「命」



函館市立赤川中学校3年

たなべ せいら  
田邊 惺菜

約六百万トン。この数字は何の量を表したものでわかるだろうか。これは「食べられるのにも関わらず廃棄される食品」の量だ。これらは「食品ロス」として大きな問題の一つとなっている。

「食品ロス」という言葉は誰もが一度は聞いたことのある言葉だと思う。でも、それがどれほど深刻な問題か、深く考えたことがある人、理解している人は少ないだろう。廃棄されている食品の量は、世界の食品不足に直面している国に対して支援できる食品援助量の約二倍だとテレビで聞き、私は驚いた。

「給食を残す人が多いから、たくさん残っているね。この余ったものはどうするのか。」と給食が終わった時間に先生が言った。それを聞き、気になって食缶の中を見てみると大量に残ってしまったおかずやご飯。その量はみんなに給食を配膳する前の量とほぼ同じ量のものもあり、クラスの半分以上の人が残している。「自分は残さず、全部食べているのにな。」と心の中でつぶやきながら、大量に残された給食を見つめていた。この大量に残された給食を見た生産者の方々、給食を作ってくれた方々はどのように思っているのだろうか。考えるだけでも胸が痛くなる。長い月日をかけてお米や野菜を作ってくれた農家さん、肉などを作ってくれた畜産農家さん、給食を作ってくれた調理員さん。この方々のおかげで食べることができるので感謝しなければならない。そして、世界には食べ物が食べられないという貧しい人達もいる。なのに食べ物に困っていない私達の勝手に「食べられないから。」「こんなにいらぬから。」という理由で大量に捨ててしまうなんて、もったいなさすぎる。あの給食のおかずやご飯、家で食べている料理の食材など、農家さん達が一つ一つ工夫し、

たくさんの方が携わり努力して作られた食品。そして作られた食品の一つ一つには生産者たちの「おいしく食べてほしい」という願いが込められているだろう。この願いを叶えるのは私達「消費者」の誰もができることだ。

このようなことから、「食品ロス」を減らすために中学生の私達にもできることがあるのではないかと考えた。一つ目は、必要以上の量を買わず、長持ちするものを買うこと。よく家庭で発生する食品ロスの例として必要以上の量を買って、食べきれずに捨ててしまうケースがかなり多い。そのため、考えて食品を買うことで家庭内で食べられるはずの食品の廃棄を少しでも防ぐことができる。二つ目は、まだ食べられる部分を簡単に捨てないこと。野菜の皮を厚く切って捨ててしまう人も多いと思う。だが、皮まで一緒に調理をする「エコクッキング」をしたり、皮をなるべく薄く切って使うと無駄なく食べ切ることができる。その他にも、すぐに食べる場合は手前の商品から買う「手前取り」をしたり、なるべく食べ残しをしないなど、食品ロスを減らすために私達にもできることはたくさんある。

日本は裕福な国であり、食品ロスが多い国でもある。一人一人が残さず食べたら終わる問題ではない。コンビニやスーパーの売れ残りの問題もある。この主張であなたの考えを深めるきっかけになれば嬉しいが、そう思わない人もいるだろう。しかし、日本で暮らす私達一人一人が食品ロスについて少しでも意識すれば変わってくるのではないかと。少し大変なことだと思うが、どれだけ時間がかかったとしても、約六百万トンの「おいしく食べてほしい」という願いを叶えていきたい。少しでも食品ロスを減らすために。

## 奨励賞



### 「違うこと、受け入れること」

名寄市立名寄中学校3年

ふじかわ さいこ  
藤川 才子

「What do you want to eat?」

「Umm… Anything is OK.」

これが、オーストラリアでのホームステイ初日の、ホストマザーと私の会話でした。何を食いたいか聞かれた私は、少し迷って何でもいいと答えました。本当は、オーストラリアのハンバーガーが食べてみたかったのですが、凶々しいと思われるのが嫌で、本心を伝えるのをためらったのです。そんな私に、ホストマザーはこう言いました。

「遠慮しないで食べたいものを教えて。ここは日本ではなく、オーストラリアなんだから。でも、遠慮するという日本の文化を私はリスペクトしているわ。」

私は文化の違いを感じる一方で、私の遠慮を理解してくれたホストマザーの言葉に、受け入れてもらえたような温かさを感じました。

ホームステイ中、学校に持参するランチはホストマザーが用意してくれ、サンドイッチと一緒に私の大好きなオレンジも一個入っていました。しかし、手で皮をむくのはとても大変で、次の日も、その次の日もオレンジと格闘することになりました。オレンジを切ってほしいなあ、でもオレンジが好きだという私の好みを知って入れてくれただけでもありがたいのに、自分の要求を出したら失礼になるのかなあ…私はそんなことを考えていました。すると、インドの友達が言いました。「ホストマザーにオレンジを切ってほしいって言うてみたら? こうしてほしいと思うことはしっかり伝えるべきだよ。でも、才子が彼女のことを思う気持ちも分かるけど。」

友達の言葉に、私はまた、文化の違いを感じ

ましたが、同時に自分の気持ちも理解してもらえたような思いがしました。

その時、私は気づいたのです。とても大事な二つのことに。一つは、遠慮や、空気を読むという日本のコミュニケーションの仕方は絶対的なものではなく、文化が違えば自分の意見をはっきり表すオーストラリアのようなコミュニケーションの仕方もあるのだということです。そして、もう一つは遠慮の文化を尊敬している、才子の気持ちも分かる、と日本的な私の考え方を理解しようとしてくれたホストマザーや友達の心の広さです。

これは私のオーストラリアでの体験ですが、普段の友達とのやりとりでも同じようなことが言えると思います。何かについての考え方や、好きなこと、苦手なことは、人それぞれです。

「私はこう思うよ。あなたは どう思う?」

「私とは違う意見だけど、そんな考え方もおもしろいね!」

そんなふうに、違いを認め合い、受け入れ合えたら、私たちはより優しい関係を築いていけると思うのです。私も自分とは違う考え方や感じ方を受け入れる心の広さを持ち、自分の思いも伝えられる人になりたいと強く思います。



## 奨励賞



### 勉強は忌むべきものか

羽幌町立羽幌中学校3年

さとう ゆきな  
佐藤 雪奈

『勉強をするのはめんどくさい』誰もが一度は考えることだろう。

学校で出される課題がいい例だ。日常生活の中で明らかに使わないような計算を解いたり、小難しい単語を暗記したり。生きていくうえで使う確証のないものを覚えろと言われても無駄に感じるだろう。

しかし、私は勉強が人生において不要であるとは思わない。むしろ、より豊かな人生を歩むための重要なものであると考える。

そもそも、私たちが嫌う『勉強』とは何だろうか。こう問われたとき、学校で習う国語や数学のような『教科』を思い浮かべる人が多いのではないかと思う。その思い込みが私たちに勉強への苦手意識を抱かせているのではないだろうか。

私は新たに挑戦し、そこから学ぶことこそが勉強だと考える。挑戦する、知ろうとする心こそ人生を豊かにする『勉強』であり、それを経ることで自分を成長させる経験値を得られる。日常の中で起こるちょっとした失敗や何気ない行動でさえも。そう気付かせてくれたのは、ある日の母の言葉だった。

その日私は家族とショッピングモールに来ていた。正月明けということもあり、私の財布にはそこそこの額の小遣いが入っていた。これだけあればゲームセンターで少し遊んでも問題ないだろうと、私は千円札を何枚か小銭にくずした。「これだけにしておこう。」そう決めていたつもりがなかなか景品が取れない。ゲームにのめり込むうちに、とうとう財布の中身が底をついてしまった。景品が取れなかったという悔しさと同時に小遣いをくれた家族への申し訳なさが沸き上がってきた。買い物を終えた母に自分がしてしまったことを謝った。ひどく怒られると思っていたら、母は私を慰めるようにこう言った。

「しかたないよ。勉強代だと思いなさい。」

『勉強代。』今まで学校で習うことばかりを勉強だと思っていた私には印象深い言葉だった。

それから私は勉強について考えに考えた。自分が思う勉強と、母が言った勉強。考ぬいた末、私はどちらも経験を経て何かを覚えるという行為であることに気が付いた。昨日緑茶を飲んで眠れなかったのも、今日の夕飯に出たピーマンを、意外とおいしいと思えたのも全部全部学びで、一つ一つが自分の経験値となっていく。そう思うと自分の毎日がより充実したものを感じてきた。勉強は私たちが思っているよりもずっと身近なものだったのだ。

また同時に、勉強は人生を豊かにするものだと感じた。緑茶が飲めないなら、また別のお茶を選べばいい。新たな種類のお茶と出会い、そのおいしさに気付くことができる。ピーマンへの苦手意識をなくすことができたなら他の苦手な食材も食べられるようになるかもしれない、と、徐々に自分の世界を広げていき、多くのものを観ることができる。

豊かな人生とは視野を広げることで手に入れることができると思う。だからこそ学ぶことは豊かな人生を歩むために欠かせない要素だと言えるだろう。

日常の中の何気ない動作一つ一つにも意味があるなら、学校での学びにも大きな価値があると私は思う。羽ばたく鳥を見て、「めずらしい種類だ」と喜ぶことも、道端に咲く花の名前や花言葉を隣にいる人と共有し、楽しむことも教科を通し、得た知識があってこそそのものだ。

勉強を通して得た経験値は私たちの生活を豊かにする糧となり、決して無駄にはならない。

失敗を恐れず、挑戦し続けようとする想いをもっていれば、勉強は人生を明るく彩ってくれるだろう。

## 奨励賞

### 本当の幸せ



礼文町立香深中学校 2年

くぼ かりん  
久保 花凜

「あなたは今、生きていることが幸せだと感じていますか」と聞かれたとき、私は「はい」と答えられるのでしょうか。たしかに私は今の瞬間を生きていて幸せだ、とは考えていません。私だけでなく、他の人たちも同感するでしょう。しかし、「生きている」という幸せが身近にありすぎて、私たち人間はそれに気づくことができているという可能性も大いにあります。そこで私は、「幸せ」について考えました。まず幸せとは、楽しさや嬉しさなどで心が満たされている、という状態のことです。また、その定義を調べてみると二つあり、「幸せとは空気のようなもので、失うことで初めて気づくもの」、「人間は対人関係の中でしか幸せを感じることはできない」とありました。幸せ、といってもいろいろな形があります。「家族」、「お金」、「地位」、「名誉」とあげていけば数えられず、キリがないものが幸せです。そこで疑問が生まれました。なぜ、幸せは人によって違うのか、と。考えてみると、それは人の性格や周りの環境に影響すると私なりの結論ができました。例えば、すごく貧乏だけれど心が豊かな人と、お金は持っていて心が豊かではない人の幸せを比べてみると、前者はきっと「家族といること」や、それこそ「生きる」という幸せを理解できているでしょう。しかし、後者は幸せをもっともっと求め、欲しがらるでしょう。それは「生きる」という幸せが当たり前になっているためだと思います。このことから私は、人間に「幸せの優先順位」があると考えました。余裕のある人はさらに上を目指し、余裕のない人は今ある幸せを大切にするのです。「ああ、私はなんて幸せなんだ」と感じれば、他人からどう見ても幸せでなくても、それは立派な自分の幸せなのです。だから幸せは人によって違うんです。美しい幸せやけがれた幸せなんてものもありません。このことをふまえて幸せの対義語は「不幸せ」ではな

く、「無」であると思います。そもそも不幸せとは、精神的、または肉体的につらい状態であることをいいます。対して「無」はなにも心で感じられず、行動に移すことができない、と考えました。幸せは他人からもらうわけではなく、自分で苦労しながら探し求めるものですから、辛い、苦しいなどの「不幸せ」を感じたら、自分から行動を起こせばいい。私は「不幸せ」も幸せの一つだと思います。不幸せと幸せを対比して幸せを感じることができるため、つまり、幸せを感じるためには不幸せが必要不可欠なわけです。では、本当の「幸せ」をどうやって見つければ良いのだろう、と考えたとき、まずは普段私たちがしていることを思い浮かべます。たとえば、「朝起きた」だったら、「朝をむかえることができた」という幸せと捉えることができます。そんな当たり前のこともよく考えると、普段私たちの周りには幸せがあふれていることに気づかされます。それでも幸せを見つけられなかったら、いつもの歩幅を変えて歩いてみる、などのささいなことでも良いのです。自分なりにゆっくりゆっくり時間をかけて見つけるのが本当の「幸せ」だと思います。私はそんな「当たり前」を大切にしていけば、幸せあふれる素敵な人生になると思います。私は「幸せ」について考えてみて、あらためて最初の問の答えが見つかりました。皆な一人一人の幸せを持ち、一人一人が世界の主役になればいいのです。かつて、ハワード・サーマンが言いました。「世間が求めることは問わないこと。自分が元気になれること見極め、努力しましょう。なぜなら、この世が必要としているのは、イキイキと輝いている人間なのですから」、と。皆さんは本当の幸せを見つけれられていますか？

## 奨励賞

# 偏った「当たり前」 —ジェンダーを通して考えたこと—

美幌町立北中学校 3年

よしだ もも  
吉田 百花



「それってオカマじゃん」、「女子力あるね」。これらの言葉を耳にしたことは、一度はあると思います。どちらも、私の身の回りで多用されています。私は違和感を覚えました。

「オカマ」という言葉は、男性がピンク色の服を着ていたり、リボンやフリルが好きだったり、女性によく見られる言動や特徴をもっている時に使われます。男性がピンクの服を着てはいけませんか？リボンやフリルが好きではいけないのでしょうか？それは個人の自由なのではありませんか。

「女子力」という言葉は、ばんそうこうをいつも持っていたり、肌のケアを怠らなかったり、という人に使われています。けれど、そのようなことが女子らしい、と決めてしまっているのでしょうか。

男性はこう、女性はこう、という決めつけで、自分の好きなことを好きと言えなくなってしまう。そんな風潮を感じて、私は憤りを覚えました。もしも自分がそのような状況に置かれたらと考えると、やりきれない気持ちになります。

新聞の読者の声のコーナーに、こんな記事がありました。恐竜が大好きな五歳の女の子が、ある日「私、女の子だから、恐竜は好きじゃない」と、投稿者の母親に言った、というエピソードでした。寝る前には恐竜図鑑を読み聞かせてもらうくらい大好きだった恐竜を、なぜ「女の子だから好きじゃない」を言ったのか。それは、先入観に囚われているからだと思います。

テレビなどのメディアや日常生活で、恐竜の柄の服を着ていたり、恐竜が好きだと話したりしている男の子をたくさん目にする、すると、「恐竜が好きなのは男の子だけだ」という先入観が芽生えてしまうのです。先入観は偏見や決めつけの原因です。たった五歳の女の子にも先入観が根付いていることが、私は恐ろしいと思いました。メディアはバランスのいい伝え方をするように気をつけなくてははいけません。そして自分自身も、先入観をもって物事を見てはいない

か、考えることが大切だと感じました。

その人がどの性別に属するか、ではなく、その人の個性をまず一番に考えるべきだと思います。何が好きか、何をしたいかなんて、一人一人違うのだから、性別で一括りにはできません。

ところで、サラサゴンベという魚を聞いたことはありますか。屋久島のあたりのサンゴ礁にすんでいます。小さい頃はメスですが、大きくなるとオスに性転換するのです。しかし、他のオスとの戦いに負けると、再びメスに戻ります。状況によって性別が変わるのです。他にも約五百種の魚や植物が自然に性転換を行います。

ミミズやカタツムリやナメクジについては、なんと雌雄同体でオス、メスという概念さえありません。こんなにも沢山の生き物が状況によって性別を変えているのに、人間はいまだ性別に執着しています。そう考えると、性別はたいしてこだわるべき事項ではないと思えてきませんか。

縄文時代までさかのぼると、男性と女性は仕事の内容に大きな違いがありました。けれど現在は、女性が大工になったり、男性が保育士になったり、体力や性別に関係なく仕事を選べます。壁がおおかた取り払われようとしているのです。

世の中は、個人を尊重するように、少しずつですが変わってきていると思います。私は希望を感じました。

性別に関係なく、好きなことを「好き！」と胸を張って言うことができたなら、とても生きやすい、気持ちのいい社会になると思います。

女性はこう、男性はこうするのが当たり前。そう思ったことはありませんか。古い時代の習慣を変えていくのは、一筋縄ではいきません。自分の「当たり前」が他の人にとっても気持ちのいい「当たり前」なのか、考えることが必要です。問題意識を持つことが変わることに繋がります。私達は、考え続けなければいけません。偏ったものの見方を、しないために。

## 奨励賞

### 思いやる心と勇気



大樹町立大樹中学校 3年

こじま ゆい  
小島 唯

私がスピーチをしているこの瞬間、世界中の人々はどんな事をしているのだろう。疲れて寝ている人やひたすらゲームをする人、または、みなさんと同じように学校で勉強をする人など様々だ。しかし、私は一冊の本を読んである事に気づかされた。それは私たちが平和に暮らしている今、世界各地では紛争や内戦によって苦しんでいる人々が大勢いること。また、犬や猫などの動物たちの命も失われてしまうこと。みなさんはこれらの事実をきいて何を思っただろうか。

私はニュースで紛争の様子を耳にしたことがあった。そのときは、

「まだ、続いているんだ。大変そうだな。」と他人事のように、遠い世界の話だと思っていた。確かに今、世界各地で起きている内戦や紛争は私たちにとって関係の無いものかもしれない。そう考える人も少なくないだろう。しかし、今から話すことを聴いてほしい。

私に内戦の様子を教えてくれたある一冊の本。題名は「シリアで猫を救う」。みなさんはこの題名をきいて何を思っただろうか。多分、私と同じように

「なぜ猫を救うのだろう。」と疑問を持った人はいるのではないだろうか。しかし、この本を読んでその考えは一瞬で無くなった。なぜなら、内戦によって人々が避難した後、そこで飼われていた動物たちがそのまま取り残されてしまうからだ。信じたくはないが、今も続いているロシアのウクライナ侵攻など、世界各地では、紛争や内戦によって多くの命が失われ、そして失われる人生がたくさんある。また、かつて一緒に暮らしていたペットや家畜たちも傷つけられてしまう。私は戦争がもたらす被害の大きさに胸がしめつけられた。今、シリアでは毎日のように銃の乱射が起きたり、ミサイルが投下されたりしている。

そんな激しく危険な状況の中、たった一人、傷ついた動物たちを保護する救助活動を始めた人がいた。彼の名は「モハマド・アラー・アルジャリール」。私はこの本を読んで、「何でもい

いから自分にできることをしたい」というアラーさんの思いが心に響いた。なぜなら、もし自分が内戦地域にいたら…と考えると、逃げることに必死で周りの状況なんて見ていられないからだ。みなさんはどうだろう。誰かを助けたりしたことはあるだろうか。正直、アラーさんのように勇気を出して行動することはとても大変だし、正直、ハードルが高くて難しいことだ。だから、大きなことではなく、小さなことから始めてみるのはどうだろう。

私はある体験をしてそのことを感じた。私がまだ小さい頃、ある一匹の子猫と出会った。その子猫は生まれたばかりで風邪をひいてしまい、日に日に弱っていった。その姿を見て「自分にできることはないか」と思い、父と一緒に葉を探したり、体を温めたりした。そのおかげで、今では元気に暮らしている。私はこの経験を通して、「勇気を出した一歩が誰かの役に立つのかもしれない」という可能性を学んだ。だからみなさんも、最初から出来ない決めつけるのではなく、「頑張ろう、できるようになってみせる」という前向きな心を持って自分の可能性を広げてみてはどうだろう。例えば、廊下や床にゴミが落ちていたら拾ったり、係や掃除の仕事を手伝ったり…。その一歩がきっと誰かの役に立ち、きっとみなさんの人生も変わると私は思う。

最後に、私から伝えたいことが一つある。それは「仲間を思いやる心」を常にもち、積極的に行動することできると誰かの役に立つ、ということだ。なぜなら、この本を通して、「何か人の役に立ったときに、一番の幸せを感じるのかもしれない」と思ったからだ。今の世の中、アラーさんのように「誰かの役に立ちたい」と活動している人は少なくないと思う。私もいつか、勇気を出して「誰かの役に立てる人」になれるよう、努力していきたい。人と人とが思い合う、明るい未来にするために。

ご清聴ありがとうございました。

## 奨励賞

### 『跳ぶ』



浜中町立浜中中学校 3年

むとう ふうま  
武藤 楓真

「はあ、またかあ。」

これは、僕が保健体育の評定を見た時に毎回つぶやいている言葉です。僕は保健体育の成績がいつも、他の教科より1つ、悪い時には2つ下でした。その理由は、僕は圧倒的に運動神経が悪いのです。卓球部に所属していますが、大会で試合に勝ったことはほとんどありません。

そんな自分を嫌いになり始めていた時です。少年の主張大会の作文の参考にしようと、全国大会報告書を読んでいました。そのとき僕は、そこに紹介されている作文たちに、1つの共通点を見つけたのです。

それは、自分を認めていることです。報告書に紹介されている全員が、自分や自分の考え方を認めていたのです。そして未来へ向かって進んでいます。

そのことに僕は驚き、気づかされました。自分を嫌いになるのは、自分を認め、先へ向かうことをできていないことが原因でした。

それから僕は、自分は何が苦手でそれを克服するためには何をすればいいのか、考えるようになりました。僕が考えた、認めるということは短所を認めるということです。苦手を克服するために、自分の短所を直視するので少し辛いこともあります。しかし、自分の弱さを認めることで自信が生まれるのだ、と考えられるようになりました。

そのように変わり始めた僕は、1つのチャンスを見つけました。保健体育、跳び箱のテストです。僕はそれを、自分を変える1歩目にしました。

それから僕は練習を重ねていきました。友人や先生からアドバイスをもらい、苦手な部分を改善していきました。時にはうまくいかないこ

ともありましたが、「これを乗り越えて自信を持つんだ」、と自分を鼓舞して頑張りました。そして、ついにテストの日になりました。

同級生たちが順番に技を披露していき、とうとう僕の番になりました。友達、先生、全員が僕を見ている。思い切って跳び箱に向かって走りだしました。そして、その時は一瞬でした。僕は足を引っかけて、着地で転んでしまったのです。「ああ、結局才能のない人はどれだけ努力をしても無駄なんだ。」僕は諦めかけていました。

しかし、先生が僕のほうへ寄ってきて、もう一度チャンスをくれたのです。ほくは、一生懸命してきた今までの練習を思い出し、もう一度頑張ってみようと思いました。

跳び箱から何メートルか離れたところに立ち、跳び箱を見据えます。そして1回目の反省をします。助走が長すぎたのではないか、手をつく位置が近かったのではないか。1回目に失敗した恐怖を頭から追い出し、走り出しました。ロイター板に足を踏み込み、跳びます。気が付くとマットの上、みんなから拍手が湧き上がりました。僕は喜びと達成感から、やったー！と叫びました。

僕はこれからの人生で壁にぶつかり、自分のことが嫌になってしまうことがあるかもしれませんが。しかしそのようなときは、短所を克服するチャンスだと前向きに考えその短所を認めてあげたいです。そして保健体育のテストのように自分を成長させていきます。

## 奨励賞

### 常識にとらわれないために



札幌市立北栄中学校3年

ごしま かずなり  
五島 一響

皆さんは「さんぽセル」というものを知っていますか。おそらく、多くの人知っているものかと思います。ですが初めて聞いた方もいるかもしれないので説明します。

さんぽセルというのは、脱ゆとり世代で教材が増え、ランドセルに入れる教材の総重量が多くなったことが原因で起こる、「ランドセル障害」の減少を図るために小学生自身が小学生のために開発した商品です。

ところが、様々な人たちからの批判が殺到しました。例えば、「重たいだろうけど、楽したら筋力が低下していかん！身も心も鍛えないと！」や、「体のバランスが悪くなり背骨のゆがみが出て体調が悪くなると思うので心配です」などといったものです。

これらの話を知って、僕は気付きました。それは、その批判の内容の多くはその批判する人の勝手な解釈で物事を決めつけているということです。先ほど挙げた例を参考に考えてみます。まずは、「重たいだろうけど…」です。これこそ、この人のさんぽセルに対しての自分勝手な解釈で決めつけてしまっている典型的な例です。さんぽセルの本来の目的は“ランドセル障害をなくす”ことですが、それをこの人は“楽をしている”というような間違った解釈をしています。なので、共感できる批判とは言えませんよね。

もう一つの「背骨のゆがみが出て…」という批判についてです。これについては、一見参考になるようなさんぽセルの欠点を挙げてくれているように見えます。ですが、背骨のゆがみが出るというのはいつどこでどのように検証した時の結果なのでしょう。はたまた本当にゆがみが出てしまったのでしょうか。実際に使ったわけでもないのにわかりませんよね。ちなみに僕もインターネットで情報源を調べてみました。すると、背骨のゆがみを確かめた結果は見つかりませんでした。そうです、つまりこの批判にはどこにもちゃんとした根拠がなくあくまでも自分の「こうなるだろうな」という予想した結果を話してしまっていることになります。なのでこ

の批判の内容もあまり共感できなくなりました。もし実際にさんぽセルを使用した人の体に悪影響が出たのなら、事例を参考に改善策を考えることが出来ます。しかし、批判する人の「本当に起こるか分からないけど心配だからやめよう」という予想を参考にしてしまえば、さんぽセルの社会問題を解決できる可能性を捨てたことになってしまいます。

今回挙げた「ランドセル障害」以外にも、今の日本は多くの社会問題を抱えています。その問題を解決するには、さんぽセルのように今の常識とは違う、全く新しいアイデアが必要だと思います。しかし、多くの人にはもしそれで未来が悪い方向に進んでしまったらとマイナスに捉えてしまい、アイデアに対して批判をしたり悪いイメージを持ったりします。つまり、私たちが突き進んでいる常識というルールからみんなが外れないようにと常識外れのもの元々のルールに戻されてしまっているわけです。なので、結局問題は解決されず、悩みを抱えた人たちが多くいるままの暗い社会になってしまいます。

けれども、何か新しいアイデアが出た時には今までの常識とは違うのでそれが当たり前なんて考えにくいかもしれません。しかし、今や当たり前のように使われているスマートフォンも発表当時は今のように普及するなんてほとんどの人が思っていませんでしたよね。このように、今は考えられなくても、未来にはきっと当たり前になっているはずです。

多くの問題を解決するためには、全く新しいアイデアが必要だと言いました。僕は、新しいアイデアに期待したいのです。常識を起点として考え、問題が解決する未来を狭めてしまうのではなく、新しいアイデアを起点として考え、目的を見失わずに議論していくべきだと思うのです。

僕も、これから生きていく上で、常識にとらわれないためにこれらの事を常に頭に入れておき、明るい日本の未来を作っていく一人になりたいです。

## 奨励賞

### 「私と剣道」



札幌市立藤野中学校 2年

さ さ き み ゆ う  
佐々木 翠優

「剣道ってかっこいい。」

部活動見学で初めて見た剣道。その見た目の格好良さに惹かれ、私は剣道部に入部しました。そして、すぐにこの競技の本当の魅力に気づくことになりました。

剣道の魅力。それは、「人間として成長するための気づき」を与えてくれることです。

「剣道は剣の理法の修練による人間形成の道である。」

という言葉の通り、竹刀の振り方や試合の仕方でも道理に合わないことは、普段の生活の中でも道理に合わないのです。

「打って反省。打たれて感謝。」入部して間もない頃、顧問の先生がこの言葉を教えてくれました。

「さっきも言ったけど、力だけで打ってるよ！手首を使いなよ！」

「それで声を出しているつもりなの!？」

「一本一本大切に打ってよね！」

部員同士で練習する際、正論ではあるけれど、八つ当たりするかのようについ言葉を仲間につけていた私。はっとしました。相手がいるからこそできる剣道なのに。言いたい放題言っていたのは甘えだと気づきました。それからは同じことを言うにも前向きな言葉を選ぶようになりました。

先生は、「剣道で学ぶ『間合い』は人間関係の上でも大切だ。」ということも教えてくれました。確かに、普段、会話をするときのタイミングがずれたり、パーソナルスペースが妙に近かったりする人の剣道の間合いは打ちづらいのです。剣道の間合いは、お互いが打つ機会をつくりやすいように、人間関係における会話は、お互いの気持ちや価値観を伝えやすいように行わなくてはなりません。自分だけではなく相手のことも考えないと成立しないのです。剣道の間合いが普段の生活と結びついている。新たな発見でした。

今年初めての団体戦。人が足りず、私は大将を

することになってしまいました。懸命に稽古はしていますが、中学校からの剣道歴。小柄な自分には、他校の大将のように仲間を引っ張っていく力も余裕ありません。それでも、覚悟を決めました。団体戦は私一人の試合ではありません。ウォーミングアップや移動の指示出し。慣れないながらも頑張りました。少しでも仲間の力になれるように。結果は、負け。仲間の手前、平静を装いました。でも、自分の未熟さを痛感し、本当に悔しかったし情けなかった。そんな気持ちで他校の試合を観戦していたとき、先生が、

「遠くから見ていたけど、仲間のために頑張ろうっていう気持ちが伝わってきた。すごくいい剣道をしていたね。」

と声をかけてくれました。自分のことを全面的に否定していましたが、この言葉に救われました。素直に嬉しかったです。頑張りを見ていてくれる人がいることがこんなにもありがたいことなのだと気づかされました。私はたくさんの人に支えられて剣道をしています。感謝しかありません。だからこそ、感謝の気持ちを心に留めておくのではなく、言葉や行動にして伝えることを大切に心がけるようになりました。

見た目に惹かれて始めた剣道。私にとってはなくてはならないものとなっています。なぜなら、「人間として成長するための気づき」を与えてくれるからです。私はこれからも剣を学ぶことを通して、素敵な人間になれるよう、日々の稽古に励んでいきます。そして、改めて思うのです。

「剣道ってかっこいい。」

## あなたの声、心に届け

山梨県 北杜市立甲陵中学校3年

まえばし まこ  
前橋 真子

「真子ちゃん、きょうだいいるの?」「妹と弟がいるよ。」「妹かあ。羨ましい。」羨ましいなんて……。私は妹の存在を口に出すのをためらうことがあった。

私の妹は生まれつき音が聞こえない重度難聴だ。左耳に音を増幅させる補聴器、右耳に脳に音の信号を送る人工内耳を付けている。発音も上手ではない。私が小学生のとき「妹、障がい者なのに元気だね。」と友達に言われた。なんとも言い表せないモヤモヤが私の心に渦巻いた。障がいのある妹が明るく元気なのは普通のことではないと思い、恥ずかしさを覚えた。そしていつの間にか妹のことを口にするのも、一緒に出掛けるのも辛くなった。

この春中学校入学を控えた妹は、補聴器を新調した。私も一緒に店に行った。そこには色とりどりの補聴器が並んでいた。お店の方は、好きな色を選ぶよう言った。私は「真紀ちゃん、黒か茶色を選んだら?」と勧めた。強く勧めた。黒か茶色なら髪の毛と同調して、あまり目立たない。みんなと変わらない見た目で見られる。恥ずかしい思いをしなくてすむように、何度も言った。しかしそんな私を見て妹は言ったのだ。「誰になんと思われても、これは私の耳なの。私は黄色い補聴器の私を見てもらいたいの。」妹に言われてハッとした。障がいにこだわっていたのは私自身だったのだ。

聴覚障がいのある妹が、明るく元気なのはおかしいのか。いや、妹は妹だ。妹が笑顔を絶やさないのは、今まで本当に沢山の努力をしてきたからだ。私と同じ小学校に行くために、人工内耳の手術を受け、手話が無くても友達と話せるように病院やろう学校に通って、発音練習を頑張っていた。誰にでも優しいのは、自分がされて嫌だったことや辛かったことを痛いほどに知っているからだ。私は、今まで辛くて、悔しくて泣く妹を何度も見た。でもその度に努力してハンディキャップを乗り越えていた。そんな

妹の努力を一番近くで見て知っているのは私だ。障がい者というフィルタを通さず、ありのままの妹を見て欲しい。手話や口話、筆談、テレビの字幕も全部、社会と繋がるコミュニケーションツールの一部だ。それが妹の全てではない。

聴覚障がい者は、一度見ただけでは耳が不自由かわからず、接し方に戸惑うことがある。でも耳の不自由な人がみんな、相手に手話を望んでいるわけではない。聴覚障がい者が困っているときは、その人の正面から「何か手伝えることはありますか。」と口を大きく開け、ゆっくり話しかけてほしい。

「思いやりのある言葉は、たとえ簡単な言葉でも、ずっとずっとこだまする。」これは貧困や病に苦しむ人の救済に生涯を捧げた、マザーテレサの言葉だ。心のバリアフリーの精神を表している。まずは聞こえないことについて知ろうとしてほしい。その思いやりでどれだけ救われる人がいることだろう。

妹は毎日黄色い補聴器をつけ、お気に入りのテニスラケットを持ち元気に登校している。先日友達に「妹さん明るくて、部活のムードメーカーで、頑張っているよ。」と言われた。ありのままの妹を見てくれていると分かり心が温かくなった。そんな妹は私の誇りだ。

私たちにできることには限りがあるかもしれない。それでもあなたの身近にハンディキャップを持つ人がいたなら、そのハンディというフィルタ越しではなく、その人自身や心に寄り添ってほしい。障がいのある人への理解が進むことで、一人またひとりと笑顔が増えていくと確信している。

妹の耳に、あなたの声は聞こえないかもしれない。でも、あなたの気持ちは妹の心に確実に、届いている。



## 大会のねらい

少子高齢化、国際化、情報化の急速な進展等、社会や環境が大きく変化する現代社会において、次代を担う少年には、心身ともに健康で他者を思いやる心を持ち、社会的に自立していき、健やかな成長が求められています。

そのためには、広い視野と柔軟な発想や創造性などとともに、物事を論理的に考える力や自らの主張を正しく理解してもらう力などを身につけることが大切であることから、少年が社会に向けての意見、未来への希望などを発表してもらう機会を設け、少年の健全育成及び非行防止に対する道民の理解を深める契機となることを目的としています。

(国際児童年の昭和54年から毎年開催)

## 大会のあらまし

■総合振興局・振興局地区大会 地区代表者の選出

■全道大会 地区代表者16名のビデオ審査を実施  
最優秀賞1名(北海道・東北ブロック代表選考に推薦)  
優秀賞3名、奨励賞12名を決定・表彰  
(最優秀賞・優秀賞の4名には、併せて「北海道コンサドーレ札幌賞」を贈呈)

■全国大会出場者の選出

全国5つのブロック(北海道・東北/関東・甲信越/中部・近畿/中国・四国/九州)毎に、都道府県代表者の主張原稿及び動画を審査し、各ブロックの代表者が選出される。

■全国大会

令和4年11月1日～11月30日の期間、特設WEBページにおいて、各ブロックの代表者12名の主張発表動画を掲載し開催する。

審査結果(内閣総理大臣賞ほか各賞)は、令和4年11月13日(日)に特設WEBページにおいて発表される。

## 審査員

■審査員長

山田 誠一(北海道中学校長会情報部副部長/安平町立早来中学校長)

■審査員(50音順)

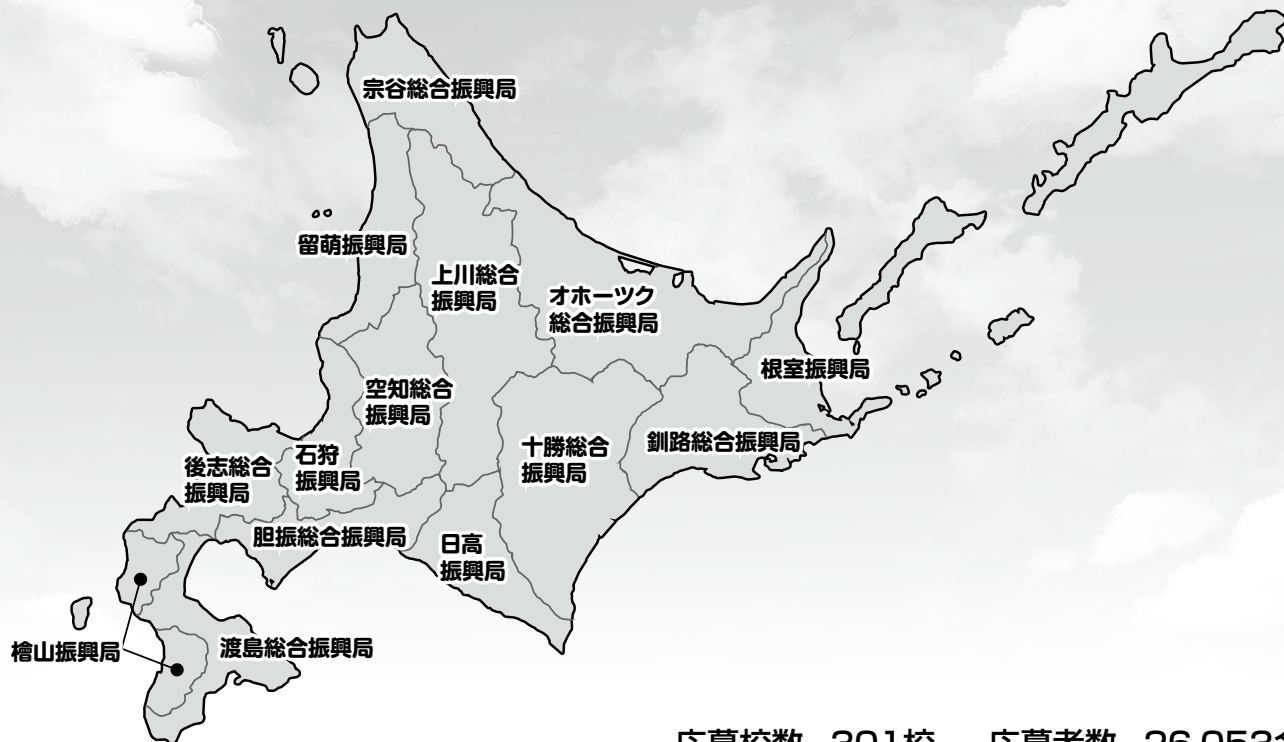
木 寄 美 和(公益財団法人北海道青少年育成協会理事/北海道新聞社編集局くらし報道部長)

出 村 好 孝(北海道PTA連合会事務局次長)

本 田 晃(北海道環境生活部くらし安全局道民生活課長)

山 田 智 章(北海道教育庁生涯学習推進局社会教育課長補佐)

# 令和4年度「少年の主張」総合振興局・振興局地区大会開催状況



応募校数 301校 応募者数 26,053名

総合振興局・振興局名	開催日	開催場所	発表者 (人)	審査委員 (人)	聴取者等 (人)
空知総合振興局	7月15日(金)	空知総合振興局5階会議室	12	4	1
石狩振興局	7月14日(木)	道庁別館5階大会議室	7	4	0
後志総合振興局	7月25日(月) ~29日(金)	各審査員の職場等において審査を実施	9	5	0
胆振総合振興局	7月14日(木)	胆振総合振興局3階会議室C	11	3	0
日高振興局	7月20日(水)	日高合同庁舎201会議室	7	5	0
渡島総合振興局	6月1日(水)	七飯町文化センター	13	5	3
檜山振興局	6月23日(木)	今金町民センター	16	4	0
上川総合振興局	7月15日(金)	上川合同庁舎3階講堂	17	5	9
留萌振興局	7月26日(火)	留萌合同庁舎1階103号会議室	8	4	0
宗谷総合振興局	7月1日(金)	宗谷合同庁舎大会議室	11	5	0
オホーツク総合振興局	7月15日(金)	オホーツク合同庁舎3階3号会議室	7	3	0
十勝総合振興局	7月8日(金)	十勝合同庁舎3階研修室	17	4	2
釧路総合振興局	7月29日(金)	釧路総合振興局3階会議室	8	5	0
根室振興局	7月15日(金)	羅臼町役場庁議室	10	5	0
<b>合 計</b>			153	61	15

※令和4年度は、新型コロナウイルス感染症の感染拡大防止のため、ビデオ審査による審査とし、聴取者を抑えて開催いたしました。

# 令和4年度「少年の主張」実施要領

## 1 目的

少子高齢化、国際化、情報化の急速な進展等、社会や国際的な環境が大きく変化する現代社会にあって、次代を担う少年には、心身ともに健康で他者を思いやる心もち、社会的に自立していける、健やかな成長が求められている。

そのためには、広い視野と柔軟な発想や創造性などとともに、物事を論理的に考える力や自らの主張を正しく理解してもらう力などを身につけることが大切であることから、少年が社会に向けての意見、未来への希望などを発表する機会を設け、少年の健全育成及び非行防止に対する道民の理解を深める契機とすることを目的とする。

## 2 主催

北海道、公益財団法人北海道青少年育成協会、独立行政法人国立青少年教育振興機構

## 3 主管

(総合) 振興局地区大会は各(総合) 振興局、全道大会は環境生活部とする。

## 4 対象

北海道内に在住の中学生及びそれに相応する学籍又は年齢にあるもの。

※国籍は問わないが、日本語で発表できること。なお、作品は未発表、自作のものに限る。

## 5 名称

少年の主張

## 6 実施方法等

### (1) (総合) 振興局地区大会

各(総合) 振興局管内(札幌市を除く)の中学生を対象に意見を主張する場を設定する。

#### ア 実施方法

新型コロナウイルス感染拡大防止のため、ビデオ審査により実施する。

#### イ 募集

- ・教育局の協力を得て、管内市町村教育委員会等を通じて、各学校に対し、周知を図る。
- ・各市町村単位、各学校単位で実施している主張大会、弁論大会等と連携した募集の他、自由公募などにより募集する。
- ・広報媒体を利用した募集に努める。

#### ウ 発表内容

次のような内容で、心からの思いや考えたこと、感銘を受けたことなどを少年らしい自由でユニークな、飾り気のない言葉でまとめたもの。

- ・社会や世界に向けての意見、未来への希望や提案など
- ・家庭、学校生活、社会(地域活動)及び身の回りや友だちとの関わりなど
- ・テレビや新聞などで報道されている少年の問題行動、大人や社会の様々な出来事に対する意見や感想、提言など

※商業的な固有名詞の使用は極力避けることとする。

※パフォーマンスや小道具の使用を取り入れてもよい。

#### エ 発表時間

5分程度(400字詰原稿用紙4枚程度)

※全国大会の規定が、学校名、氏名、タイトル等の部分を除く「作本文の出だし」から「作本文の終わり」までで4分30秒～5分30秒となっているため、この範囲内に収めてください。

#### オ ビデオの録画

各学校等において、審査に使用するためのビデオを次の撮影条件等に留意して撮影・録画し、DVD-R等を利用して所轄(総合) 振興局へ提出する。

(撮影条件)

- ・学校の体育館や広めの教室・会議室など、熱意や迫力のある発表を行うことができ、無背景で撮影できる場所。室内で撮影し、逆光や影がないよう注意する。

(画面配置)

- ・主張発表者が画面の中央に配置され、胸部から頭部まで主張発表者の顔や表情が鮮明に認識できる状態で映っており、正面から撮影されていること。画面比率(アスペクト比)は横長であること(16:9の比率を推奨)。

(ファイル形式)

- ・MP4

(留意事項)

- ・主張発表者は、脱帽の上、発表すること。
- ・主張発表が開始から終了まで途切れることなく収録されていること。
- ・主張発表がはっきり聞き取れること。
- ・テロップや音声の挿入、複数動画の合成などの加工がされていないこと。
- ・雑音が極力入っていないこと。
- ・感染防止対策(距離の確保や消毒等)を行った上で撮影を行うこと。
- ・提出前に、各学校においてDVD-R等のウイルスチェックを実施すること。

## カ 審査

- ・関係機関等に、選考に係る審査員の推薦を依頼する。
- ・審査により、順位付けし、最優秀者1名及び優秀者2名を決定する。

## キ 審査基準

### (ア) 論旨

- ・鋭い感性で、新鮮な主張であるか。(中学生らしさ)
- ・新しい情報や視点があるか。
- ・個人の体験にとどまらず、一般性・社会性があるか。
- ・提案や提言を実現・実践する意欲が感じられるか。
- ・論旨が一貫し、構成がしっかりしているか。

### (イ) 論調

- ・主張の内容が共感と感銘を与えているか。
- ・説得力ある話し方であったか。
- ・話し振りに熱意と迫力があるか。

## ク 実施月(審査月)

原則として7月の「青少年の非行・被害防止道民総ぐるみ運動強調月間」に実施する。

## ケ 表彰

- ・最優秀者1名及び優秀者等に対して賞状等を授与する。
- ・表彰に当たっては、賞状の他、副賞の授与など、地域の実情等に応じ、予算の範囲内で工夫して差し支えないこと。

## コ 推薦

最優秀者を全道大会参加者として、令和4年(2022年)8月5日(金)までに、環境生活部に推薦するとともに、最優秀者のビデオを提出する。最優秀者が参加できない場合は、次位の者を推薦する。

## サ その他

別添の地区大会実施要領案を適宜変更して要領を定める。

## (2) 全道大会

(総合) 振興局からの推薦者各1名及び札幌市中学校長会からの推薦者2名を対象に審査を実施し、最優秀者及び優秀者3名を選考する。また、全道大会参加者の主張を発表する場を設定する。

### ア 審査・選考

- ・審査は、関係機関等から推薦された審査員が発表原稿及びビデオをもとに実施する。
- ・ビデオは、(総合) 振興局地区大会最優秀者14名については同大会で使用したビデオ(全道大会用に撮り直したものを含む。)を用いる。
- ・札幌市代表者2名については、全道大会用に学校等において撮影・録画したビデオを用いる。撮影・録画に係る留意事項は(総合) 振興局地区大会と同様とする。
- ・審査基準は、(総合) 振興局地区大会と同様とする。
- ・審査により順位付けし、最優秀者及び優秀者(以下、「入賞者」という。)を選考する。
- ・審査結果は、公益財団法人北海道青少年育成協会のホームページ上で発表する。

### イ 発表

全道大会参加者の主張を発表する場は、令和4年度北海道青少年育成大会(9月2日(金)開催)とし、入賞者による主張発表を実施する。

※新型コロナウイルス感染症等の状況に応じて、実施方法を変更する場合があります。

※また、全道大会参加者の主張(ビデオ)を、公益財団法人北海道青少年育成協会のホームページ上で、一定期間公開する。

### ウ 表彰

入賞者には賞状及び副賞を授与し、入賞者以外の審査対象者には奨励賞を贈呈する。

入賞者には、令和4年度北海道青少年育成大会席上で授与し、その他の参加者へは、(総合) 振興局及び札幌市中学校長会の協力を得て伝達することとする。

※新型コロナウイルス感染症等の状況に応じて、実施方法を変更する場合があります。

### エ 全国大会への推薦

全道大会最優秀者を全国大会出場候補者として、独立行政法人国立青少年教育振興機構に推薦する。最優秀者が全国大会に出場できない場合は、優秀者のうち次位の者を推薦する。

## 7 その他

- ・主張発表者の原稿は400字詰原稿用紙(A4)縦書きで、本人自筆による原本(障がい等による場合はワープロ可)とする。
- ※異なるサイズの場合、A4サイズに書き直した原稿が必要となりますので、ご注意ください。
- ・応募された作品は、原則返却しないこととし、北海道に帰属するものとする。
- ・応募された作品は、原則返却しないこととし、北海道に帰属するものとする。
- ・原稿の書き出しについては次のとおりとする。

4 行 目	3 行 目	2 行 目	1 行 目
作 文	北 海 道	学 校	タ イ ト ル
~	氏 名	学 年	

# 「少年の主張」全道大会 歴代最優秀賞並び優秀賞受賞者名簿

年度	最優秀賞（北海道知事賞）		全国大会	優秀賞（北海道教育委員会教育長賞、北海道PTA連合会会長賞）			
	学校名	氏名		学校名	氏名	学校名	氏名
S54	利尻町立沓形中学校	池原 広文	出場 総務長官賞				
S55	根室市立光洋中学校	小林 優美	出場				
S56	様似町立様似中学校	川上美穂子					
S57	初山別村立豊岬中学校	高橋 未央	出場				
S58	鹿追町立鹿追中学校	最上佐緒里					
S59	厚沢部町立厚沢部中学校	後藤 晃					
S60	和寒町立和寒中学校	高岡 智扇		札幌市立手稲東中学校	庄田 香織	更別村立更別中央中学校	西川 朋憲
S61	小平町立達布中学校	紅屋 優		美唄市立美唄中学校	堀川 卓郎	稚内市立稚内南中学校	山崎 直美
S62	鶴川町立鶴川中学校	伊藤 奈美	出場	音更町立音更中学校	佐々木詩津子	和寒町立和寒中学校	岡本 百里
S63	砂川市立豊沼中学校	小林ますみ		増毛町立増毛第二中学校	上坂奈緒美	更別村立更別中央中学校	竹川 暢
H 1	江差町立江差中学校	中川 昌子		釧路市立鳥取西中学校	薄井 理砂	別海町立中西別中学校	白井 貴之
H 2	鹿追町立瓜幕中学校	高橋恵美子		旭川市立広陵中学校	三浦 愛子	初山別村立有明中学校	新田千佳子
H 3	稚内市立稚内東中学校	森田 淳		中札内村立中札内中学校	中西 志香	美幌町立美幌中学校	飯島 紀子
H 4	弟子屈町立弟子屈中学校	横川 心	出場 文部大臣賞	白老町立虎杖中学校	中村有希子	江別市立江北中学校	藤城 正興
H 5	生田原町立生田原中学校	仁木利沙子		浦河町立浦河第一中学校	高田 牧生	別海町立中西別中学校	林 美穂
H 6	生田原町立生田原中学校	前島 由衣	出場	旭川市立六合中学校	中村 沙織	余市町立西中学校	高山 仁美
H 7	幕別町立糠内中学校	中村 郁洋	出場	標茶町立磯分内中学校	岡崎奈未子	札幌市立新陵中学校	出林 裕佳
H 8	滝川市立明苑中学校	紺野友里子	出場	標茶町立磯分内中学校	藤本 智子	富良野市立山部中学校	寺井 正美
H 9	中標津町立広陵中学校	谷口 麻衣		七飯町立大中山中学校	竹安 玄太	苫前町立古丹別中学校	中嶋 卓広
H10	本別町立勇足中学校	岡本あすか		札幌市立北都中学校	野原 梓	天塩町立啓徳中学校	大岩奈々恵
H11	根室市立柏陵中学校	分部 史織		江差町立江差中学校	柴田 優	中富良野町立中富良野中学校	杉原 咲
H12	稚内市立宗谷中学校	熊谷 慶子	出場	釧路市立北中学校	大井里紗	北広島市立西部中学校	畠山 直子
H13	新冠町立新冠中学校	中村みなみ		虻田町立虻田中学校	佐々木千恵	猿払村立拓心中学校	藤井 美咲
H14	共和町立共和中学校	本間 絵美		釧路市立武佐中学校	佐藤くる美	恵山町立東光中学校	佐藤 亜未
H15	釧路市立美原中学校	佐藤 妃奈		岩見沢市立上幌向中学校	森谷 紀治	歌登町立志美宇丹中学校	渡辺のぞみ
H16	熊石町立熊石第二中学校	山脇 恭子		上富良野町立東中中学校	熊谷 佳苗	鶴居村立鶴居中学校	木村 友紀
H17	新十津川町立新十津川中学校	三吉 莉湖		歌登町立歌登中学校	金子 佳美	せたな町立大成中学校	正村 早紀
H18	北斗市立石別中学校	山田 亮一	出場	岩内町立岩内第一中学校	松山亜莉紗	枝幸町立志美宇丹中学校	渡辺ともみ
H19	枝幸町立志美宇丹中学校	渡辺ともみ		当別町立西当別中学校	萩原 有希	伊達市立長和中学校	本田 舞音
H20	岩内町立岩内第一中学校	熊野 遥華		幌延町立問寒別中学校	佐藤慎之介	池田町立池田中学校	新居 詩穂

# 「少年の主張」全道大会 歴代最優秀賞並び優秀賞受賞者名簿

年度	最優秀賞（北海道知事賞）		全国大会	優秀賞（北海道教育委員会教育長賞、北海道PTA連合会会長賞、北海道青少年育成協会会長賞 H22～）			
	学校名	氏名		学校名	氏名	学校名	氏名
H21	寿都町立寿都中学校	石王 凱騎		礼文町立香深中学校	中島佳奈子	千歳市立富丘中学校	中田 翔哉
H22	遠軽町立生田原中学校	阿部 愛		北海道教育大学付属釧路中学校	恒川 礼奈	増毛町立増毛中学校	加藤 修人
				帯広市立清川中学校	横山くるみ		
H23	別海町立中西別中学校	盛合 樹		苫前町立古丹別中学校	永井 星奈	釧路市立幣舞中学校	田名部あゆみ
				栗山町立栗山中学校	濱谷 珠美		
H24	猿払村立拓心中学校	熊谷 春奈		厚岸町立真龍中学校	山田 唯	札幌市立月寒中学校	安田 りな
				遠別町立遠別中学校	丸山 美月		
H25	帯広市立川西中学校	畠山 優輝		札幌市立平岡中央中学校	高野 大河	釧路市立鳥取西中学校	米内 真志
				江別市立江別第二中学校	最知なるみ		
H26	稚内市立稚内南中学校	熊谷 七海		釧路町立富原中学校	山岸 永和	帯広市立帯広第五中学校	深町 陽奈
				鷹栖町立鷹栖中学校	高木 倅凪		
H27	北海道教育大学附属札幌中学校	前田ほの香		千歳市立勇舞中学校	山田 萌未	帯広市立川西中学校	西野 侑未
				苫小牧市立緑陵中学校	吉岡 美月		
H28	白糖町立庶路中学校	松橋 愛美		豊富町立豊富中学校	伊藤 佑茉	標津町立標津中学校	上田 礼芽
				長沼町立長沼中学校	倉田 友美		
H29	白糖町立白糖中学校	阿部はるか		芦別市立啓成中学校	渡部 胡桃	旭川市立神居東中学校	若林 千夏
				新ひだか町立静内第三中学校	坂本 安侑子		
H30	洞爺湖町立洞爺中学校	毛利 郁也		厚岸町立真龍中学校	車塚花瑠香	岩見沢市立東光中学校	藤塚 麗瑠
				中標津町立広陵中学校	楓川 奈央	※美幌町立北中学校	田元 克
R01	登別明日中等教育学校	小路 藍花		帯広市立帯広第四中学校	吉田 千玲	北斗市立茂辺地中学校	房田 心玖
				岩見沢市立清園中学校	谷内 楓		
R03	洞爺湖町立洞爺中学校	吉野 真帆		厚岸町立真龍中学校	伊藤 琉希	美幌町立北中学校	中山 芽依
				和寒町立和寒中学校	佐藤 莉子		

※R2=新型コロナウイルス感染症の影響により、「少年の主張」事業を中止

※H30=北海道150年記念 特別賞

毎月  
第3  
日曜日

ほーんわか、ほーっとする日。

# 道民家庭の日

家族ふれあい協賛店・  
施設を利用しよう!

毎月第3日曜日に子どもを連れた  
家族が、料金の割引などのサービス  
を受けることができます。

※優待券(コピー可能)の提出が必要です。  
ホームページから取得できます。

「道民家庭の日」は  
家族みんなでふれあい、  
団らんする日です

家族そろって食事をしたり、  
家族が団らんする機会を持ちましょう。

「道民家庭の日」  
イメージキャラクター  
ほーほーくん

ホームページ  
はこちらから



LINE  
はこちらから



令和4年度

「少年の主張」全道大会発表作品集

発行 公益財団法人北海道青少年育成協会

〒060-0005

札幌市中央区北5条西6丁目1番地23 第二道通ビル  
TEL (011) 231-6451 FAX (011) 231-6457  
URL <http://www.ikuseikyo.jp/>  
E-mail [youth@ikuseikyo.jp](mailto:youth@ikuseikyo.jp)



北の大地に輝け 君の青春

# 北海道 青少年基金



伸びよう 伸ばそう 青少年

北海道青少年基金にご協力を

北海道青少年基金は、北海道110年記念事業として、21世紀の北海道の担い手となる若者たちが積極的に社会に参加し、連帯の輪を広げていくことを願って創設されたものです。

この基金は、青少年の社会貢献活動、文化活動、グループ活動を支援、助長するために活用されます。

北の大地に躍動する若い力を応援するため、皆様のご協力をお願いいたします。